

時の実感が無い、と、あの日あの人は言った。

同じ状況にあるわけではないけれど、その気持ちは判らないでもない。あれから一年が経ったのだと理解はしているし、今日まで様々なことが起きていたが、年をひとつ越えた、それだけの時間が過ぎているという感覚が、ふとどこかへかき消える瞬間がある。

今、まさにそんな状態になった。

「こつちは湿気が多くて参るねー。うちの地元のほうは、もつとカラッとしてて過ごしやすいんだけど」

備え付けの冷蔵庫から取り出した炭酸飲料を一気飲みして、汀が肩をすくめる。「よっ」空になった缶を手首のスナップで飛ばすと、缶は綺麗に放物線を描いてゴミ箱へ飛び込んだ。

梢子はそれを目で追ってから、自身の手にある同じ缶へ視線を落とす。中身はまだ減っていない。

一年。

その程度では、人はそうそう変わらないらしい。

手の中で遊ばれている缶をみとめて、汀が左目を軽く眇める。別に鬼を見ようとしているわけではなく、たんに訝しく思っただけだろう。

「飲まないの？ 別に代金請求したりしないわよ。どうせあたしが出すんじゃないし」

「ここも、『若』が用意してくれたの？」

呆れ混じりに問いたずねると、汀は「そんなとこ」と悪びれもせずに笑った。

二人がいるのは高校生がひよいと泊まれるとは思えない広さを持つ、ホテルの一室である。いくら全国大会出場者とはいえ、学校がこんな部屋を汀ひとりにあつらえてくれるはずがない。かといって、自腹というのも考えにくい。

ならば彼女が属する守天の、上にいる者の力添えだろう。たいていそうなご身分だ、と思うのは意地が悪すぎるか。

「編入だし、キャリア一年で全国まで来ちゃったからね。けっこう浮いてんのよ」

ソファへ深々とうずまった汀が苦笑と共に言い訳をする。こちらが眉をひそめたことに対してだろう。部長を務めている身としては、こういう団体行動を乱す……むしろ乱さないために離れる行為は、あまり好ましくない。

「編入して周囲から浮いてまでやるのが、私に対する嫌がらせ？ 頭が下がるわね」

下がると同時に溜め息も出るが。

「じゃあ、可愛い可愛いオサに逢いたかったの、って言いなおしとく？」

「……いらない」

聞かれた時点で「冗談になってしまっから、言われたところで嬉しくもなんともない。

聞かれる前に言われていたら喜んだかと問われたら、まあ、それも少々、返答に困ってしまうけれど。

缶の中身を半分くらい嚙下して、梢子はひたと汀を見つめる。射抜くほどの気合が入っていたが、相手は射抜かれるどころか射すくめられもせず、軽く首を傾げるだけでかわしてみせた。「で、団体行動を引つ張らなきゃいけない、和を乱しちゃいけない他校の部長をこんなところに引つ張り込んで、いったい何の用？ これも嫌がらせ？」

「うわー。相変わらず頭文字S」

「なら嬉しいんじゃないの？ 頭文字M」

一年ぶりの再会だというのに、二人の会話は相変わらずで、三つ子の魂百までと言うには、出会いの時点でお互い育ちすぎていたのだけだ。

「つれないな」

「そうね。向こうでも坊主ばかりだったし、釣りの才能ないんじゃないの？」

「……やれやれ、健在だわ」

汀の口から、はふうう、と溜め息。何が健在なのかはあえて訊かない。

「だから、何の用で……」

重ねて問おうとした梢子を、電子音が阻む。礼儀として汀から距離を置き、ポケットから音の主である携帯電話を取り出して耳に当てると、遠慮がちな声が届けられた。

『あ、梢子先輩、いま大丈夫ですか？』

マナージャーの保美からだった。姿を消したのが大会直後の喧騒の中、しかも連れて来られたというよりさらわれたような勢いだったので、保美をはじめとして部員たちも何が起きているのかよく判らないのだろう。それで、心配した保美が電話で確認を取りにきたわけだ。

「大丈夫よ。なんか、ごめん、汀が……うっん、急に出てきちゃって」

すべて説明すると長くなるし、端的に説明すると「疾風のように現れた汀に『ひゃっほう』みたいな感じでかつさらわれました」というなんとも情けない顛末を告げなければならぬので、思わず言葉を濁した。

『いえ、汀さんと一緒なのは、こっちも見てましたから。先生が、帰りは何時くらいになるのかだけ聞いておきたいということなんですけど』

心なしか、汀の名前を出したあたりで保美の声が沈んだように思える。どうしたのだろう。

「ああ、ええと……」

送話口を手で覆いつつ、ちらりと汀へ視線を送る。「汀、これってどのくらいかかるの？」用事の内容がまだ判っていないので、そんな代名詞ばかりのたずね方になってしまったが、ちゃんと理解してくれたらしく、彼女は両手のひらを天井へ向けて肩をすくめ、「さあ？」とジェスチャーで示してきた。特別時間を気にするような用事でもないのか。

まったく、と溜め息がひとつ。会話の相手を保美に戻す。

「ごめんね、ちよつと判らないんだけど」

『いまは、汀さんの学校の人たちと一緒になんですか？』

「ううん、なぜか汀と二人」

『え……』

まったくもって不思議だが、保美の音がさらにその深度を下げたような。

『そ、そうですか。……じゃ、じゃあ、今日はそっちに泊まる、とか……？』

「え？ そんなわけじゃないじゃない。戻るわよ。あまり遅くならないようにするから」

当たり前だ。部長が勝手に抜け出して外泊なんて言語道断である。

沈んでいた保美の音が少し復活した。

『じゃあ、先生にはそう伝えておきますね』

「ん、ありがとう、保美」

『いえ』

簡単な通話を終えて、さて仕切りなおしと汀のもとへ戻ろうとした時、壁に立てかけてあった長物に足を引っかけてしまった。朱色の袋に入ったそれは固定されていたわけでもないのに、重力にしたがつてあっさり倒れる。

「あ、ごめんね汀」

倒れたそれを直そうと手を伸ばして、既視に覆われた。

袋に入った長いもの。長い、得物。

違う、これは、この中身はそうではない。入っているのは竹刀だ。長さが違うし、大会中、汀がこれの結びを解いて竹刀を取り出すのを見ていた。だから、この中には釣竿も……。

棍も、入っていない。

一瞬止まった動きをごまかすように、自然な速度を装って、袋を壁に立てかけた。

壁を向いていた身体の向きを元に戻すと、こちらを見ている汀と目が合った。

汀は頭の後ろで手を組んで、両目を細めた優しい表情を浮かべている。

ああ、何度か見た顔だ。

こちらを気遣っている時の顔だ。

至近距離で見たこともある。心地よい距離で見たこともある。覚えている。

その表情が、ふと翳った。

「変わらず……。一年経つても、変わらず、か」

「なによ？」

汀はソファから立ち上がり、手が触れる位置まで梢子へと歩み寄ると、指先で柔らかく頬へ触れた。

「あたしが近くにいると、それが枷になるんじゃないかって思ってた」

「枷？」

「そのままよ、足枷。先に進むのを阻むモノ」

彼女の言葉の意味が判らない。確かにこの一年、コンタクトはなにもなかったものの、たとえばなにかがあったとしても、今とそうそう変わるとは思えないのだが。

「あたし程度じゃ変わらないか」

「だから、なんなの？」

「……あたしがいなければ、あんたは夏姉さんを思い出さずに済むんじゃないかって、ね」

驚いて、どくりと、左胸が轟いた。

毒に冒されたか、理を犯されたか、急激に血の気が引いて、

それと同時に汗が吹き出る。これは、罪悪感か。

梢子の内側で真紅が疾駆する。赤。流れる赤は暗い。正確に言えば黒い。黒いのは赤を受ける布の色だ。見せつけられた赤と黒。見せ続けられた赤と黒だ。己の罪が何度も見せてくる場面。

これは……記憶だ。『敵』から守ろうとしてくれた、その人柄に焦がれていた、その強さに憧れていた、大切な人の記憶。

罪悪がもたらした暗い無我によつて、梢子の足元が崩れる。

「おおっと、オサ、しっかりしてよ！ ……ってあたしのせいか」

倒れこみかけた身体を支えた汀の、後悔をにじませた呟きが聞こえた。落としそうになった缶まで救助したのはさすがの勘の良さ。

さきほどまで汀が座っていたソファへ運ばれて、額の汗をハンカチで拭かれる。「大丈夫。ごめん、ありがとう」左胸は落ち着いていないが、持ち前の生真面目さでそう言った。「ずいぶん素直ね」少しだけ不満そうな返答があった。

汀の言うとおりだ。

彼女に再会してから、事あるごとにあの人を思い出している。

きっと、その前も、意識しないレベルで……意識し続けて無意識にまで昇華したレベルで。

呼吸のように、虚空のように。

在り続けて無くなってしまったのと区別がつかなくなったように、あの人は身の内に存在していた。

「大会に出たのはね、まあ始まる前に言った理由もあるんだけど、あなたの剣がどうなってるのか見たかったのも、ひとつの理由」

「剣……」

その先は、言われなくても判っている。

「で、試合で見せてもらったわけだけど。変わってなかった」
自分でも、それは知っている。

「あなたの剣はまだ夏姉さんの影迫いのままで、それはつまり、夏姉さんを忘れてないってこと」

鬼となったあの人の、記憶に残る剣筋を真似して。

あんなふうになってしまっても、あんなにも恐ろしい経験をして、梢子はまだ、鬼ごっこを続けている。

もう鬼も他の子もいないのに、捕まえられたまま誰にも解放されずに、ただ捕らえられた場所から動かずにいる。

「だけど、それは、夏姉さん……夏ちゃんは、ずっと前から私の憧れだったから」

「でしようね」

「夏ちゃんは、ずっとああだったわけじゃないし……。ずっと前は、もっと優しく、強くて」

「けど、優しくなくてももっと強い時もあった。それは八年のブランクがあったとしても地続きでしょ。人の身体は、新陳代謝の結果として七年で細胞全部が入れ替わるっていうけど、あの人はそれすらない。八年前とまったく同じ身体と心でオサの前に顕れた。違ってたのは在り方だけだね。オサ、あなたもそう思ってるはずよ。……いや、あなたこそ、か」

汀は賢しくて、話していると苛々する。的確なことしか言っていないから叱られている気分になる。

そうか。こうならないように、彼女は遠くへ行っていたのか。

両手によりがえる、生々しい感触。鬼となったあの人を切った記憶。その身体は、鬼となっても、たしかにあの人だったのに。

見上げていた天井が緋色に染まった。「……！」思わず腰を浮かせるが、その両足も、ソファに添えた両手も緋色が染み付いていた。

まぼろしだ。これはただの記憶の残滓だ。この緋色はここにはない。あるのは九年前と一年前だ。判っているのに恐怖と後悔で涙が出てくる。

「オサ！」

震える両手を汀が強く掴んできた。ああ、駄目だ。彼女の手まで血に塗れる。いや、すでにこの手は塗れていたか？

もういくつもの鬼を屠っているその手は、数が多すぎてあの人の血は紛れているか？

「オサ！ ちょっとこちら、戻って来い！」

「みぎ、わ。私、私と、あなたは、夏姉さんを」

あの人を知っている人、覚えている人はたくさんいるけれど、あの人を切ったと知っているのは、自分たちと、今はどこにいるか判らないもう一人だけだ。

ああそして、あの人を切ったのは、あの身体を傷つけたのは。

だから、だから汀は、同じ血を浴びた彼女は、自分と同じ血を帯びた彼女は……！

「違う！ たしかにあたしとあんたで剣鬼カヤを切った！ けどねえオサ！」

ぐい、と腕を引っ張られる。痛い。しかめた顔を、強く覗き込んでくる碧い瞳があった。

「夏姉さんを……鳴海夏夜を切ったのは、あたしだけよ」

「汀……」

そうだ。

彼女は優しいから、あの人を切らずに済ませてくれた。

彼女は厳しいから、あの人を断ち切れない己を許してくれない。

あの日の色、緋色はまだそこら中に広がっている。

血溜まりに沈む己を、彼女は掬い上げに来てくれたのか。

「汀は、私を助けてくれなかった。夏姉さんだけ助けて、私のことは助けてくれなかった」

「そうね」

この手で、あの人を救わせてくれなかった。

あの人から「ありがとう」と言ってもらえる権利を、横から奪った。

けれどぎつと、あの中はそれを含めて、汀に礼を言ったのだらう。

そうしていたらおそらく、永遠に続く痛みを抱えてしまうはずで、それはあの人が最も望んでいなかったことだ。

汀は飄々としていて、人をからかってばかりで、喧嘩をすることも多かったのだけれど、いざとなれば自分が傷ついても……咎を負ってでも人を助けようとするのだと、そういう人の弱さを、人の良さを持っていると、知っている。

彼女はあの時、本当の意味で、自分たちを助けた。そうすることですぐのように、「助けてくれなかった」となじられると判っていただろうに。あの人を願いを叶えて救って、こちらの願いは叶えず救った。

「でもあたしはオサに助けられたからね。お返しはしないと」
適当そうに見えるくせに、律儀なことだ。

汀が両手の封じを解いた。力の入らない両手はだらりと下がる。代わりのように首へ彼女の両腕が回って、近づいてくる。

「ほら、オサ。今なら言える。他に誰もいない、コハクさんもない、あたししかない。今あんたがなにを言っても、あのことを知ってるあたししかない。見ざる聞かざる言わざるつてわけにはいかないけど、『見ざる』『言わざる』は、してあげてもいい」

頭が梢子の顔を過ぎて、お互いの右耳どうしが並ぶ位置へと進む。柔らかく抱きくるむような姿勢で、汀はそれきり押し黙った。

どれだけ泣いても見ずにいてくれると、ここであったことは、ここで言ったことは、誰にも言わないと、そういう約束をしてくれた。

すぐそばなのに、相手の顔が見えないギリギリの位置、見ずの際にいる汀が、ぼんと一つ、頭を叩いた。

誰もいない。二人しかない。汀しかない。

そのための——この部屋なのだろうか。

禁足地ではないが誰も入ってこれない。安息地でもないが少なくとも余計な不安はない。

間接照明でいろどられた薄明かりの部屋は、緋色を少しだけ曖昧にさせている。

だから、口を開けた。

「……夏姉さん」

さよならは言えた。一度目は言えなかった逝く人への別れを、あの日は言うことができた。

けれど、一度目も二度目も。

「……ごめんね」

謝罪は、できなかった。

「ごめんね夏ちゃん。」

あなたを——諦めて、ごめんなさい」

さよならを言ってしまったあの瞬間、己はあの人を諦めた。

最後まで諦めなかったが、最期には諦めた。

「——あ——」

口に出してしまっただろうしようもなくなって、引きつれた喉から、か細いか細い慟哭がとめどなく溢れて、自分の力では止められなかった。

涙は雨のように頬を流れた。

汀は約束を守って、止まるまで見ないでいてくれた。

ふう、と梢子が小さく息をついたのがきつかけになって、汀が腕を下ろす。身体も離れた。けれど完全に離れたわけではなく、さきほどと同じように、それぞれの手で梢子の手を掴んでくる。梢子としてもなにかよすがが欲しかったので、その手を拒まずにいた。

闇上^{Alt. of. Pain}がりの梢子の顔は、雨上^{Alt. of. Pain}がりのように晴れ晴れとはいかなかったが、その瞳はもう、痛みをいだいていない。

「どう、出すもの出してスッキリした？」

「……もうちよつと言いかえなさいよ」

眉を寄せて答える。「大丈夫みたいね」汀が笑った。

空調が低く唸っている。梢子の耳が今まで知覚していなかった音を拾う。間違いようのない回復の証だった。

「にしても、やっぱり早まったかな。もう少し様子見しといたほうがいいとは思ってたんだけどね」

「じゃあ、どうして……」

「決まってるでしょ」

汀は、にい、と猫のような笑顔になって。

「可愛い可愛いオサに逢いたかったの」

ちゅう。と、猫なのに鼠の泣き声みたいな音を立ててキスをした。

「——なっ、ななな！」

「一年ぶり三回目。そろそろ慣れたら？」

「慣れるわけじゃないでしょう！」

これはさすがに緋色どころではない。他に誰もいないのはラッキーか。いや、そもそもこの事象自体が非常事態のアラッキーではないだろうか。

前とは違う意味で左胸が速まる。ソファは大きな背もたれと肘掛で構成されており、両手を汀に掴まれているから、押しのない限り逃げることは叶わない。そして残念なことに、腕力では汀に敵わないのだ。

ぐぐつと両腕に力を入れてみるが、汀はさして苦労もしていない顔でそれを押さえ込んできた。体勢としてのしかかるような形になっているので、体重をかけられる分、あちらに文字通り分がある。

「ソファよりベッドに連れて行くべきだったかも。中腰って、けっこうつらいのよね」

「だったら、さつさと離れて腰伸ばしなさいよ！」

第一、ベッドとはどういうことだ。それは、二人で寝転がって、さつきみたいなおことをするという意味か。

うっかりそんな図を想像してしまって、梢子の首から上が赤を超えて紅に染まった。

「はあ……」

背後と左右にはソファ、前方には汀とすっかり包囲されて、梢子は物分りの良い犯罪者よろしく抵抗を諦めた。

「汀くらい変な子、私の周りには今までいなかった」

「変って、しつづいねー。それでも常識人のつもりなんだけど」

彼女の言い分に文句はない。口八丁手八丁を良しとする困った性格の持ち主ではあるが、だからといって非常識なわけではない。まあ、裏側の行動に関しては非常識、というか常識外ではあるのだが。それは彼女のせいではないだろうし。

ああ、だから、彼女が変というか。

梢子に対する行動が、非常識なのだ。

「……正直に言えば、どうしたらいいかわからない」

そこら中にいきなりキスをしてくるような女の子がいたら大変だ。最初にしたのは自分のほうだが、あれは人命救助だ。やましいものも悩ましいものも全くなかつ……なかつた。うん。

汀はどこかきょとんとして、「苦手ってこと？」と尋ねてきた。

「苦手、とは違うけど……」

「実を言うと、あたしはオサのこと、ちょっと苦手」

「え？」

予想外の告白に、今度は梢子がきょとんとする。

猫の目がさらに細くなって、視線は変わらない柔らかさだったが、どこかいたずらな光を帯びた。

「オサ相手だと、あたしの得意技が半分使えない」

彼女の得意技は、口八丁手八丁。

……なるほど、口をふさいでしまったら、口八丁は使えなくなる。

いや、これもある意味、口八丁と言えるのでは？

まだ両手は押さえ込まれたままなので、手のひらで紅潮した頬を冷やす事もできず、せめてと睨みつけてみた。

「もしかして、汀ってキス魔？」

「オサ限定で言えば、そうかもね」

本心の見えない猫の笑顔で汀が答える。単純にからかっているのか、複雑な本音があるのか、可能性は低そうだが、返答は単純な本音と考えられないこともない。

抵抗されないのを幸いと、肯定を行為で証明しようというつもりなのか、汀が更に口づけてくる。慣れはしないが……なんというか、こう、あまり悪い気は、しなくなってきた、ような気がする。

一瞬だけ離れて、角度を変えてまた触れて、交じり合う呼吸を外へ逃がしたり、己の内へ取り込んだり、手持ち無沙汰なせいか親指で手の甲を撫でられたり、こちらからも触れてみたり。

なんだか熱烈になってきたような気がして我に返る。閉じっぱなしだった目を開けると、オレンジに近い汀の髪が視界に広がっていた。

——太陽みたい。

詩的で、抽象的な陽の色だった。

彼女の生まれ育った地の色だ。

死的で具象的な緋色よりは薄いから、どれだけ陽色を見つめたところで両手の緋色は塗りつぶせないけれど、空から降る光と同じ意味を持つその色は、梢子の中で着実に、唇を合わすごとに、言葉を交わすごとに領土を広げていく。緋色に染まっていないこれからの記憶が、陽色に染まる。

視界には、すでに緋色はない。両手は変わらず塗れているが、同じ色を持つ彼女の手とつなぎ合わさって、境界が曖昧で、自身の手がいくらか塗り塗れているのか判断できなくなっていて、明確さがないから多少気が軽くなっている。

心地が良い、という表現を、否定はできない。

とはいえ。

「あの……汀」

「ん？」

「ちょっと……長いんじゃない？」

長いというか、多い。回数が。

雨だれのような唇が、ふとその勢いを止めて半月を作った。

「オサが早く慣れるようにと思つて」

「あのねえっ」

「動物にはね、舐めて傷を治す本能があるのよ」

経験不足な行為を慣らすために、深い傷を負って滑らかさのない心を均すためにと彼女は言う。

どちらかといえば、馴らされているような気がしなくもないが……。

「何回する気よ？」

「そうねえ。なかなか手ごわいけど、ま、千回もすればなんとかなるかな」

「いや、多すぎでしょ……。どれだけかかるのよ」

「なに言ってるの。たった一時間でも、二千六百秒もあるのよ？」

三秒に一回でもお釣りが来る、と汀がチエシヤ猫じみた笑みを浮かべた。

「まったく……。この、キス魔」

つつい「じゃあ帰りは何時頃になるんだろう」などと考えてしまつて、直後、彼女の言葉を真に受ける必要はないのだと気づく。

羞恥に息をついた隙をついて、汀がまた唇を落とした。

「そういえば、魔って字には鬼が隠れてるわね」

離れた陽色が落とした眩き。その一瞬前、ちらりと唇を舐められたような感触があったが、勘違いだと思っておく。

「ああ、たしかに……」

「守天の鬼切りが隠れ鬼か。あんまり笑えないわね」

「夜な夜な、誰彼かまわずキスして回るわけ？」

「言ったでしょ、オサ限定だって」

「どうして、彼女はこう。」

問うな。惑うな。これはきつと嘘つきな彼女の口八丁だ。

立ち入ればたちどころに捕らえられる。

けれど、訊くことで幸く未来を得られるとしたら？

二律背反な是と否の欲求。梢子はかすかに喉を揺らす。空調が効きすぎているのか乾いて痛い。そのくせ室内の温度は高く

て目眩がしそうだ。熱の元はどこだ。目の前に佇む陽だ。

陽にあてられた梢子は眩む。

「……それ、どういう意味？」

「さあ、どういう意味でしょう？」

返答は半ば予想していたが曖昧で、それが残念なような、妙な安堵感を覚えるような、漠然とした感覚を覚える梢子だった。

曖昧な答えは曖昧な効果を及ぼす。

手のひらは重なつたまま離れない。

まぶたを下ろすとそこに柔らかいものが触れた。ごくごくかすかな感触だった。遠慮ではなく、確固としたものにしたくなく、という意思の表れか。

それを受けた梢子は半分だけまぶたを開けて、至近距離にある体温へ頬をこすりつけた。

「夜な夜な私にキスしにくるっていう意味なら、ご遠慮願いたいんだけど」

「あら、嫌なの？」

「……………」

溜め息は、室内へかき消える前に彼女が吸い込んだ。

鬼ごっこで鬼に捕らえられた子は、他の子が助けってくれるまで囚われの身のままである。

さて、助けてくれたのが鬼だった場合、やはりその鬼に囚われるのだろうか。

この鬼は……猫のグルーミングみたいにしつこくしつこく、もう何度目か数えるのも忘れるくらいキスをしてくる陽色の鬼は、おそらく他の子を捕らえはしないだろうし、誰も助けてはくれないだろう。というか、誰かに来られたら困る。

蜘蛛討ちも《劍》も、もう無い。あつたところで切りはしない。無手はなにも切れない。過去にいたあの人も、現在に在る彼女も。

だから、このまま二人で、緋色の記憶が巣食った二人で、慣れないまま、離れないまま、陽色の記憶を作っていくのも悪くはないのかもしれない。

血溜まりから救ってくれた彼女と、陽溜まりの中で。

剣を携えずに、千を数えながら。

光降る地上で、実りある日常を。

「ちなみに干って、数の単位だけじゃなくて、『すごく多い』って意味もあるんだけどね」

「どうやら数える必要はないらしい。」